

ヤスパースにおける「交わり」と「理性」*

“Kommunikation” und “Vernunft” in Jaspers

布施 圭 司**

Keiji FUSE

概 要

ヤスパースの思想において「交わり」(Kommunikation)が重要な役割を果たしていることは、よく知られている。「交わり」の概念規定は『哲学』(1932)において詳細になされており、基本的にはヤスパースの全時期にわたって大きな変更はないと考えられるが、著作により若干異なる位置づけを与えられていると思われる。特に『理性と実存』(1935)以降に、ヤスパースの哲学において「理性」(Vernunft)が重要な役割を果たすようになり、『哲学的信仰』(1948)以降に、実存の信仰が理性を手段とする「交わりの信仰」である「哲学的信仰」(der philosophische Glaube)として明確な規定を与えられたことは、交わりの概念の変化を内包しているのではないかと考えられる。本論考ではヤスパース哲学の展開におけるこのような「交わり」の思想の変遷を跡づけることを試みる。具体的には、第一に、最初の哲学的著作である『哲学』と、『理性と実存』以降の著作であり、理性についても詳しく展開されている『真理について』(1947)を主として参照し、『哲学』および『真理について』における「交わり」の概念と意義を確認し、両者を比較する。第二に、『哲学的信仰』における理性による「哲学的信仰」の思想の中での「交わり」の働きについて明確化する。これらの作業を通じて、ヤスパースにおける「交わり」と「理性」について考察する。

1 はじめに

ヤスパースの思想において「交わり」(Kommunikation)が重要な役割を果たしていることは、よく知られている。最初の哲学的著作である『哲学』(Philosophie, 1932)以来、多くの著作で交わりについての論究がある。『哲学』においては、実存は実存同士の交わり、すなわち「実存的交わり」においてのみあることが強調されている。また、『理性と実存』(Vernunft und Existenz, 1935)以降、理性がヤスパースの哲学の手段と主張されるようになるが、ヤスパースは自らの理性概念の規定の一つとして「交わりへの意志」を挙げている。そして実存にとっての真理が「交わりの真理」(die kommunikative Wahrheit)であると主張されるように

なる。また、『哲学的信仰』(Der philosophische Glaube, 1948)以降、実存の信仰として主張される「哲学的信仰」は、他者との交わりを求める信仰とされている。晩年は『啓示に面しての哲学的信仰』(Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung, 1962)において、哲学的信仰と宗教的信仰の交わりが論究された。

「交わり」の概念規定は『哲学』において詳細になされており、基本的にはヤスパースの全時期にわたって大きな変更はないと考えられるが、著作により若干異なる位置づけを与えられていると思われる。ヤスパースにおける「交わり」の意義の変遷は、ヤスパースの理解にとって重要であると言える。特に『理性と実存』(1935)以降に、ヤスパースの哲学において「理性」(Vernunft)が重要な役割を果たすようになったこと、また『哲学的信仰』(1948)以降に、実存の信仰が理性を手段とする「交わりの信仰」である「哲学的信仰」(der philosophische Glaube)として明確な規定を与えられた

* 原稿受理 平成22年10月1日

** 一般科目

ことは、交わりの概念にも影響を及ぼしたと考えられる。理性は様々なものを結びつけ統一をもたらす働きとされているが、「全体的な交わり意志」(der totale Kommunikationswille) という規定も与えられている。また、哲学的信仰の根本的な特徴として「交わりの信仰」(Kommunikationsglaube) が挙げられている。本論考ではヤスパース哲学の展開におけるこのような「交わり」の思想の変遷を跡づけることを試みる。具体的には、第一に、最初の哲学的名著である『哲学』と、『理性と実存』以降の名著であり、理性についても詳しく展開されている『真理について』(Von der Wahrheit, 1947) を主として参照し、『哲学』および『真理について』における「交わり」の概念と意義を確認し、両者を比較する。第二に、『哲学的信仰』における「哲学的信仰」の思想の中での「交わり」の働きについて明確化する。これらの作業を通じて、ヤスパースにおける「交わり」と「理性」について考察する。

2 『哲学』における「交わり」

(1) 実存的交わり

『哲学』においてヤスパースは、人間の交わりを、原初的共同性、意識一般の交わり、精神の交わり、実存的交わりの四つに区分している。最初の三つは、経験的に心理学的、社会学的に考察可能な対他関係であり、内在的交わりと言うことができる。これに対して、実存的交わりは、対象化されない自由としての自己存在同士の交わりである。

原初的共同性とは、共同体の生活への素朴な参加としての交わりである。意識一般の交わりは、相互に同一な対象的意識同士の論理的な思惟による交わりである。精神の交わりは、理念によって導かれる何らかの精神世界への関与である。最後に実存的交わりは、自由の主体としての代替しえない個人同士の交わりである。実存的交わりは内容的には内在的交わりと別のものでなく、内在的な交わりをまさに自己のものとして受け取ること、つまり自己化し、自由な行為者として交わりに参与することと言える。

実存的交わりにおける個人同士は、共に内在的秩序から独立し、自由に行為する実存であることを自覚する。他者が自らにとっての単なる対象、働きかけの受け手であるだけなら、相互のやり取りが存在せず、事物の事物に対する関係となります。相互のやりとりがあってはじめて、自らが自由であること、また他者とは異なる自らの自由のあり方が認識される。実存的交わりは、自由な

自己存在同士の相互承認という性格を持つ。

実存の自覚は、単に「明らかになる」ことに止まらない。「この開顕されること (Offenbarwerden) は、けれども同時に、自我が自己として、はじめて、現実となることである。(中略) 実存の可能性は、その開顕過程において、自己を明白にしつつ自己を創造するところのものである」(Jaspers 1932 II:64) と述べられている。実存的交わりにおいて、自己は主体的に行為する存在として明らかになるのですが、その行為を実行してはじめて自己は成立する。実存的交わりは、自己認識だけではなく、自己の現実化、自己生成という意味をも有すると言える。

実存的交わりは、固定的に存立するもの同士の関わりではなく、常にそれぞれの存在が問われ、明らかになるような関係である。このことをヤスパースは「愛ある闘争」(liebender Kampf) と表現する。ただ単に互いの存立を承認しあうのではなく、互いのあり方が厳しく検討され、実存としての互いの自由とそれによってそのつど為されるべき使命が自覚される相互検証という意味を、実存的交わりは持つ。

ヤスパースによれば、哲学は実存の自覚や真理を探求する営みだが、それらは交わりによって遂行されるわけであるから、「一個の思想は思惟の遂行が交わりを促進する割合に比例して、哲学的に真である」(Jaspers 1932 II:110) ということになる。真正な哲学するはたらきは同時に、真正な交わりでもあるとヤスパースは主張する。

(2) 「交わり」と超越者

『哲学』において、交わりと超越者の関係については、「それ [実存] は、自由の他の存在と共にまたそれによって存在するのみならず、それ自身ある存在に関係しているものであり、この存在は実存ではなくてその超越者なのである」(Jaspers 1932 III:2) などと述べられ、「交わり」と「超越者」が並列的に提示されているように思われる。そもそも『哲学』は、第一巻『哲学的世界定位』、第二巻『実存開明』、第三巻『形而上学』からなり、超越する働き (Transzendieren) をそれぞれ、世界認識、実存の開明、超越者についての思想、において叙述するという構成になっている。交わりについての主な叙述は、実存の開明に関する第二巻にあり、超越者に関する主な叙述は、超越者についての思想に関する第三巻にあり、それぞれ別個に論究されているとの印象がある。

実存にとってすべての事物は超越者の現れ、すなわち「暗号」(Chiffre) となるとされる。しかし暗号と交わりの関係も、十分に判明とは思われない。「私があるところに在って何らかの可能になる交わりへと入りうるころの世

界が、私と共に在ることによってそれ自らに成った時、初めて私は自分に成るのである。自由は他の人々の自由へと結ばれており、自己存在はそれの尺度を隣人たちの自己存在、そして所詮、万人の自己存在の内に有している。この実現の最終的な挫折 (Scheitern) において初めて、存在が何であるかが顕われるのである」(Jaspers1932III:226)。「挫折」は、超越者は時間内では到達不可能なものとして現われるという「決定的な暗号」である。交わりもまた挫折するという形で超越者に開かれることをこの引用は述べている。個々の暗号に対する交わりの意義については、実存的交わりにおいては、世界内の事物は交わりの媒介となり、超越者の象徴としての暗号となる、と類推はできるが、十分判明ではないとの印象を受ける。

『哲学』においてヤスパースは、無制約的行為、限界状況、歴史性、絶対的意識といった様々な観点から実存のあり様を叙述しており、それらの観点の一つとして「交わり」がある。交わりは実存の特徴づけの一つとして扱われており、交わりと超越者の連関については十分明らかとは言えない。

3 『真理について』における「交わり」

(1) 交わりの区分について

『哲学』における交わりの規定は、基本的にその後も継承され、大きな変更はない。しかし『理性と実存』以降の区分と若干相違する点があるので、その点に簡単に触れておきたいと思う。

『哲学』においては、自己存在が現存在と実存に区分されている。現存在というあり方における諸相はそれほど明確になされていないが、先に述べたように、原初的共同性、意識一般、精神という区分を読み取ることができる。『理性と実存』では「包越者」という概念が提出され、自己存在の区分がより、明確になされた。それに伴い、用語が若干変更されている。比較すると、『哲学』における原初的共同性、意識一般、精神、実存という自己存在のあり方は、『理性と実存』以降は現存在、意識一般、精神、実存と捉えなおされることになる。現存在という用語は自己存在の生命的な側面に限定され、意識一般、精神とともに内在的な側面とされるようになる。図示すれば次のようになる。

	『哲学』		『真理について』	
自己存在の様態	原初的共同性	現存在	現存在	内在的 自己存在
	意識一般		意識一般	
	精神		精神	
	実存		実存	

(2) 「統一への意志」(der Wille zur Einheit) としての理性

『真理について』では、理性は「統一への意志」とされ、「全体的な交わりの意志」(der totale Kommunikationswille) という規定も与えられている。まず、『真理について』における「理性」について概観したいと思う。我々に対する存在の現象は種々な様態があり、四分五裂しており、それに応じて何が真であるか、真理の意味も多様である。ヤスパースは、真正な真理、真理そのものは、多様な真理の統一でなければならないと考える。その統一という形で、超越者は実存に対して現象するとヤスパースは考える。そして、その統一を探求するはたらきが「理性」とされる。

「すべての状況のなかで、理性は、いかなるものであろうと存在するものを、相互に無関心なものの拡散状態から相互依属 (Zueinandergehören) の運動へと取り返すことを欲する。理性は、すべてのものを、関係のない状態から、また相互に無縁なもの (Fremde) の偶然から、相互に再び関わらせることを欲する。何ものも喪失されてはならないのである」(Jaspers1947:114)。すでに確定的な事物の間の関連を明確化するのは、悟性のはたらきと言え、一般的には悟性と理性は区別されない場合もある。しかしヤスパースは、理性は悟性の働きを包含しつつ、内在的な現象を越え、あらゆるものの統一を志向する働きと考える。悟性はある観点から事物を固定的に捉え、閉鎖的な知をもたらすが、そのような固定化を理性は乗り越える。理性は、無関係にみえるものの間にも関連性と相互依属性を見出し、結びつけようとする。

それが可能になるのは、次のような理性の機能によるのである。「理性は、一者へと迫りゆくその衝動のなかで、存在するものを聞き取り (vernehmen) うるのみでなく、また己れを関与せしめうるのみでなく、何であろうと己れが出会うものを運動へともたらず。理性は問いを發して言葉を貸し与えるから、理性は、一つの知や一つの事実やかくある存在 (Sosein) や、一切の存在ではない一つの存在に甘んずることを許さないような、不安定さをひき起こす。それゆえ理性は、全ての根源を可能にする

ことであり、それら諸根源が展開され開示され、語るようになり、己れを関係づけ、純粹になるように可能にすることである」(Jaspers1947:115f)。現にある状態で無関係と思われる事物同士は、悟性的には無関係なものとして扱われるしかない。しかし理性は現にある状態に動揺を与え、運動にもたらずとされている。悟性は、事物を一つの観点から、あるいは事物を限られた他の事物との関係から、捉える。これに対して理性は、事物をあらゆる観点から、あるいは他のあらゆる事物との関係から捉える。一つの観点到に捉えられることなく事物を検討することにより、一つの観点からは現に存立し安定している事物も、それだけで独立して永遠に存在するようなものではないことが明らかにされ、不安定にされる。理性は、事物の根源や根拠を問い、明確化し、孤立して存立している状態を突破する。そのことによって、一見関係がないもの同士も、より広い場面へともたらされ、相互に結びつけられるようになる。そして、その結びつきは最終的にはあらゆるものの統一である超越者に根拠があるはずであるから、理性の働きはすべてを統一である一者の探究という意味を持つことになる。

超越者はすべてのものの統一と言えが、それは対象的な統一として固定されるようなものではない。「理性は統一を求めるが、その統一は単なる統一のための何らかの統一ではなくて、一切がそこにおいてあるような一者である。この一者は、到達しえないはるかなところから来るもののように、一切の分裂を超克する牽引力(Zugkraft)として、理性を通じて現前するものとなる」(Jaspers1947:118)。何らかの具体的な統一として超越者が実現するなら、それはやはり閉鎖的で限定された統一である。そのような限定を越えた統一そのものが超越者であり、実存にとって決して「到達しえない」と考えられる。このことは『哲学』における「挫折」と同様のことを指していると思われるが、分裂を克服する力という、超越者の積極的な側面が明確化し、理性にとって超越者は、統一する作用の根拠であり、目標であるということが言える。

(3) 「理性」と「交わり」

次に『真理について』における「交わり」について概観したいと思う。基本的には『哲学』と同様であり、「交わり」の区分についても『哲学』の区分がおおむね継承され、「実存的交わり」の重要性も同様に説かれていると言える。『真理について』の特徴としては、理性と実存の相即性が主張されている点が挙げられる。「理性は実存に担われていて実存なしには没落するであろうが、この実存

と結びついた理性は、理性の方から言えば、実存の真理を可能にするのであって、実存が現実化され実存が開頭されることを可能にする」(Jaspers1947:116)。理性はあらゆるものを統一する働きであったが、それが可能になるためには、あらゆる存在に開かれることが必要である。そのためには、理性の働きは内在者から独立した実存によって遂行される必要がある。例えば、意識一般に担われれば、対象的に明確で論理的に妥当な事物にしか理性は関われないことになり、それはむしろ悟性と呼ばれるものである。逆に実存も理性によって統一という目標を与えられ、世界における自由の現実化を果たせる。理性を欠けば、実存は単なる秩序からの逸脱であり、我意に留まることになる。理性と実存が相即不離ということは、実存的交わりも理性によって遂行されると考えてよいと思われる。

交わりと超越者の関係については、次のように述べられている。「交わりの非完結はそれゆえに、超越者以外の何ものも充実する(erfüllen)ことのできない深みの開示可能性となる。すなわち、神が永遠であるならば、人間にとって真理は生成する真理(werdende Wahrheit)として、しかも交わりへと生成する真理(Kommunikation werdende Wahrheit)として存在する。この交わりから分離するならば、真理は存続している真理として、自分で存在する代わりにあるものの知へとただちに退化し、時間的現存在のうちで消えてゆく(verzehrend)要求の代わりに完成している満足へと退化するであろう」

(Jaspers1947:980)。交わりが完結せず、そのつどの状況で常に新たに遂行されることが、超越者に関わる道と言え。直接的には世界内で有限な対象と関わることしかできない実存が、世界を越えた超越者に関わるためには、交わりを常に継続し、あらゆるものの統一を求め続けることが必要と言え。交わりが終結するならば、時間内の限定された統一がもたらされるのみであり、統一そのものは見失われてしまうことになる。先に理性の統一について、超越者は統一作用の根拠や目標と考えられると述べたことがここでもあてはまる。すなわち、超越者そのものは交わりのなかで示されることはないが、交わりの根拠あるいは目標として現象する、と言え。この点も『哲学』における「挫折」と同様なことだが、やはり超越者の積極的な側面が明確化したと言えのではないか。

さて、実存的交わりは個人同士の「狭い」交わりであった。これに対して、『真理について』の理性はあらゆる存在開かれた「広い」交わりを求めるものである。これに関しては、「歴史的な深みの充実ということがまさに、

限界のない広さの開放性 (Offenheit) に結び合わされている」(Jaspers1947:172) と述べられている。実存的交わりは、固有の領域があるのではなく、他の交わりの中かで現象するものであった。現存在的交わりや意識一般の交わりや精神の交わりに深みを与え、閉鎖性を突破し、この突破によって、量的な無際限 (Endlosigkeit) を追求するのではなく、質的な無限 (Unendlichkeit) へと開かれ、超越者への繋がりができることになる。実存的交わりはあらゆる交わりの根底に働いており、それらを真正なものとすると考えられる。

以上のように、『真理について』においては、交わりが理性によって遂行されるということが主張されるようになっていく。実存のあり方があらゆる存在の統一を探求するということとして捉えられ、より明確になった、と言える。『哲学』においては実存のあり方の一つの規定であった交わりが、超越者の探求そのものという意義を与えられるようになったと考えることができる。

しかしながら、暗号と交わりとの関係については、『哲学』同様に十分には述べられてはいない。理性と暗号の関係については、「哲学される程度に応じて、一切の運動は理性的な運動となり、一切の衝動は愛となり、一切の对象的なもの、妥当的なもの、目的をもっているもの、なされたもの、創造されたものは、暗号となる」(Jaspers 1947:962) などという叙述があり、理性が純正な場合、その対象は超越者の現れである暗号となる、と解釈できる。従って、理性が交わりを追求するとき、その対象は暗号となる、と類推することはできる。しかし、それ以上の論究は、ヤスパースの暗号論や信仰論をさらに検討した上で、なされるべきと思われる。

4 『哲学的信仰』における「交わり」

(1) 「哲学的信仰」の概念の成立

ヤスパースは、『哲学的信仰』1948以降、実存の信仰として「哲学的信仰」を提唱するようになる。信仰および実存の信仰についてはそれ以前の著作でも言及が見られる。例えば、『哲学』においては、「世界観の核心は信仰である」(Jaspers1932 I :246) と述べられ、人間は信仰に基づいて生を営むと考えられている。また、「もしひとが、自らを自己の超越者に関係づけられているものとして意識する実存的無制約性を、既に宗教と名づけるとすれば、哲学もまた一つの宗教となるであろう」(Jaspers1932 I :295) と述べられ、哲学も宗教も超越者への信仰として捉えられ、その上で、自由に基づく哲学的信仰と権威に基づく宗教的信仰が対比されている。

この議論の構図は、『哲学的信仰』や『啓示に面しての哲学的信仰』と同じである。⁽¹⁾ また、実存の存在確信である「絶対的意識」の一つとして「信仰」が叙述されている。従って、後に「哲学的信仰」として概念化される実存の信仰が萌芽の形で見られると言える。

『真理について』では、信仰について明確には論究されていないが、普遍的統一としての「汎教性」(Katholizität) と「理性」の対比が叙述されており、この対比は『哲学的信仰』や『啓示に面しての哲学的信仰』における、啓示に基づく宗教的信仰と理性に基づく哲学的信仰という対比につながっていると考えられる。また、「確信 (Überzeugung) の真理は、そのつど言われたことや、行動および生が、決して对象的にはならない実存、もしくは実存によって把握された理念、および実存によって認められる超越者と一致することである。この一致は一つの項が对象的ではないために客観的に確証されることはない。それは実存の絶対意識に基づいてそのつど検証される。非真理は強制的確実性がなくても、存在自体が確実であるならば、やはり確信の不可避の確実性によって認識されるのである」(Jaspers1947 : 470) とされ、実存の確信が超越者との一致として述べられている。そして、「ここで「確信」という名前前で簡単に触れた真理の確実性はこれからさきでの本質的な、それ自体で分類される主要テーマであろう。確信は精神の理念による指導として、実存の信仰として、超越者の現前として現実的である。これらの確実性のなかでは本来的な真理存在が、深淵から語りかけるように、われわれに対して語りかけているのである」(Jaspers1947 : 470) とされ、実存の確信が信仰とされている。従って、『真理について』でも哲学的信仰につながる考えは現れていると言える。

しかしながら、「哲学的信仰」が明確に規定され、主題として論究されるのは、『哲学的信仰』においてである。この点を林田新二氏は、「「信仰」がヤスパース哲学全体の核的領域を示すような地位にまで自覚的に高め深められた」と述べられている。『理性と実存』以降、主観と客観を越え包む、存在そのものである「包越者」(林田氏は包括者という述語を用いられている) が主張され、包越者の探求が哲学の働きとされるようになる。林田氏は、『哲学』や『真理について』における「信仰」と『哲学的信仰』における「信仰」を比較し、包越者論との関連で信仰が規定され、包括者そのものを探求する働きが「哲学的信仰」として明確化されたと指摘されている。特に、包括者の諸様態が「一般的で非本来的な超越者」であり、それに関わることは「広い意味での信仰」であり、「すべ

ての包括者の包括者」は本来的超越者であり、それに関わることが「本来的な信仰」である、との指摘は示唆深いものと思われる。⁽²⁾

ここでは、「理性」と「交わり」という観点から、「哲学的信仰」の思想を論究したいと思う。

(2) 「哲学的信仰」と「理性」

『哲学的信仰』では、広義の信仰とは、それに基づいて生き、それに向って生きるべきものとされる。この規定については、一般的に通用している規定と言えよう。ヤスパースの特徴としては、「包越者」というヤスパースの概念から信仰を特徴づけることである。「包越者」とは主観と客観を越え包む、我々にとっての現象がそこで生成する場所である。存在そのものは、単なる主観でも単なる客観でもなく、それらを包含する包越者である。主観のあり様、客観のあり様に応じて包越者は様々な様態が考えられるが、『哲学』で語られた「超越者」は『理性と実存』以降、「包越者そのもの」「一なる包越者」などという規定を与えられるようになる。この規定は、超越者が様々な存在の統一であることに対応する。そして、「信仰とは、包越者に基づく生であり、包越者による導きと充実である」(Jaspers1948:20)とされる。信仰は、主観的な想念にとどまらず、客観的な信仰内容が主観に作用し、主観の生の根拠となっているあり方である。そして、実存の信仰は包越者そのものとしての超越者への信仰とされる。

『哲学的信仰』における「哲学的信仰」の概念の特徴は、理性を手段とするという点が明確に主張されることである。「哲学的信仰、すなわち思惟する人間の信仰は常に、ただ知との結びつきのうちにあるという特徴をもっている。哲学的信仰は知りうるものを知ることを欲し、自分自身を見通すことを欲する」(Jaspers1948:13)。哲学的信仰は思惟を手段とするが、思惟とは十全な場合理性によって遂行されるゆえに、哲学的信仰は理性を手段とする信仰と言えよう。「理性は悟性なしにはありえないが、しかし限りなく悟性より以上のものである。哲学的信仰は、理性を不可欠の契機とする。そして全ての他の真理の意味は、それが理性の運動の中で明澄にされる場合のみ、純粋に顕わになってくる」(Jaspers1948:38)。

「理性」に関しては、『哲学的信仰』における規定は、『真理について』と同じと言えよう。例えば、「理性は、一切の真理を己れの内に含むのでないような、何らかの一つの真理の意味のうちに自分を固定してしまうことを禁ずる。理性は、妥協することや袋小路に陥ることや、どんなに誘惑的であれ狭いものの中で満足してしまうこ

とを禁ずるし、また、実在性であれ妥当性であれ可能性であれ、何らかのものを忘却し無視することを禁ずる。理性は、何ものをも見捨てず、存在している一切のものに関わりをもつことを強く求め、また、あらゆる限界を超えて存在するものと存在すべきものを探求し、諸々の対立をも包含し、たえず全体とあらゆる可能な調和とを捉えることへと突き進む」(Jaspers1948:38)。と述べられており、「統一への意志」とされている。また、「しかしさらに、理性はあらゆる全体を突き抜けて再び不可避的な突破を獲得しようと努める。理性は完結した調和を拒絶する。理性は、本来的な存在を覚知するために極端なものに向かっていく」(Jaspers1948:38)。閉鎖的、部分的な調和を突破し、全体へと向かう。『真理について』と『哲学的信仰』は、理性の規定という点では、変更はないといってよいと思われる。

(3) 「哲学的信仰」と「交わり」

では、『哲学的信仰』における「交わり」に関してはどうであろうか。理性が、「交わりの意志」であるという規定は、『哲学的信仰』でも述べられている。例えば、「理性は際限のない交わりを要請するのであって、理性自身が総体的な交わりへの意志なのである。私たちは時間の中で一なる永遠の真理としての真理を客観的な所有物の形で持つことはできないのであるから、また、現存在はただほかの現存在とともにのみ可能となり、実存はただほかの実存とともにのみ自分自身に到達するのであるから、交わりこそが時間の中で真理が顕わになっていく形態なのである」(Jaspers1948:40)。理性によって交わりを追求することが実存のあり方であることがここでも主張されている。従って、哲学的信仰は「交わりの信仰」(Kommunikationsglaube) (Jaspers1948:135)と言えよう。理性によって、交わりを追求することが超越者を探求することになり、それが実存の信仰のあり方である。

従って、哲学的信仰は実質的には、『哲学』以来論じられてきた実存の超越者への関わりと同じであり、『哲学的信仰』では理性を手段とし、交わりを求める点が明確化したと言えよう。それならば、「哲学的信仰」は、体系的な知識としての哲学ではなく、いわゆる「哲学すること」であると言えよう。ではなぜ「哲学的信仰」と呼ばれねばならなかったのか。この点について、ヤスパースは必ずしも明確に述べていないように思われるが、我々はどう考えたらいいであろうか。

「哲学的信仰は、交わりを求める絶えざる心構えと切り離しがたいものである。というのは、本来的真理は、信仰の出会いという場面で包越者が現前するところでの

み生成するからである。それゆえ、信仰する者のみが交わりを現実のものとすることができる、という命題が通用することになる。—これに反して非真理は、相互に排斥し合うだけの信仰内容の固定化から生成してくる。それゆえにまた、信仰の戦士とは語り合うことができない、という命題が通用することになる。哲学的信仰は、あらゆる断絶の強制やその断絶を欲するあらゆる意志の中に、悪魔を見てとるのである」(Jaspers1948 : 134f)。哲学的信仰は信仰と信仰の交わりという場面で成立する。最も広い統一を志向するなら、個人が最も広い統一を志向し、それは信仰という場面で現れ、その信仰同士が関わるという場面がその場になるはずである。ある実存に対する超越者の顕現は「自己にとっての」という限定がつく。しかし、普遍的な広さを追求するならば、他者にとっての超越者の顕現をも視野に収める必要がある。

ここでは「交わり」は個人が超越者を探求するという手段であると同時に、それ自体目標でもある。「限界なく交わりを進めようとする心構えは、知の結果ではなく、人間存在における一つの道に向かおうとする決意である。交わりの思想は、ユートピアではなくて信仰である。各人がこの交わりへと突き進むか否か、また彼が、彼岸にあるものではなく全く現前しているものを信じる仕方で、この交わりを信じるか否かが問題である。それは、私たち人間の内在可能性を、つまり現実とともに生きともに語り合うという可能性を、そしてこの共同を通じて真理への道を見出し、その途上において初めて本来的自己になるという可能性を、信じるか否かという問題である」(Jaspers1948 : 135f)。

このことはより端的に次のような叙述に現れている。「哲学的信仰はこうした[交わりを幻想とする]誘惑や主張に対抗するのであって、交わりへの信仰(Glaube an Kommunikation)とも呼ぶことができる。というのは、ここでは次のような二つの命題が、すなわち真理は私たちを結びつけるものであるという命題と、真理は交わりのうちにその根源をもつという命題が妥当するからである。人間は世界の中で、自分が理解し信頼しながら結びつくことができるかけがえのない現実として、他の人間を見出す。人間の間での結びつきのあらゆる段階において、運命を同じくする人たちは愛し合いながら真理への道を見出すのであるが、しかしこの真理への道は、人間が孤立し、強情や我意に陥り、孤独の中に閉じこもる場合には見失われてしまう」(Jaspers1948 : 40)。哲学的信仰は交わりを不可欠の要素とするというよりも、「交わりへの信仰」と言える。理性により統一や交わりを追求する哲学することは、交わりへの信仰としての哲学的信

仰を根拠とするとさえ言えないであろうか。

交わりへの信仰についてさらに考察するには、信仰と信仰の関係について、また哲学的信仰と宗教的信仰の関係についてさらに検討する必要があると思われる。この点の検討は、哲学的信仰と宗教的信仰の関係について詳細な論究がある『啓示に面しての哲学的信仰』(1962)も考慮に入れてなされるべきであろう。

(4)「哲学的信仰」における「超越者」と「交わり」

次に、「哲学的信仰」における「超越者」と「交わり」の関係について考察しよう。

実存と超越者の関係については、『哲学』や『真理について』と同様の規定がなされている。「信仰は自由の途上で見出されるが、その自由は、絶対的な自由でも空虚な自由でもなく、自己が自己自身にとって脱落したままであることと、自己が自己に贈り与えられることとの可能性として経験される。私はただ自由を通してのみ超越者を確信する。自由を通して私は確かに全世界から独立した一つの地点に到達するが、しかしそれはまさしく、根本的に超越者に拘束されているという意識を通してである。というのも、私は自分自身によって存在しているわけではないからである。」(Jaspers1948 : 53)この点は、『哲学』以来の、自由の贈与者としての超越者という規定と同じである。また、「しかしながら、行為を普遍的なものから十分に導出することはできないため、神の導きは、普遍的なものの中でよりもむしろ歴史的に具体的な要請の根源の中で、より一層直接的に聞き取ることができる。しかし、十分な確信をもっていても、こうした聴取にはなお疑問の余地が残る。神の導きを聞き取る際には、間違いを犯す危険が潜んでいる。というのも、聞き取られる内容は依然として多義的であり、必然的なものを明白に一義的に知ることにはかならず思われるような自由は、完全なものではないからである。私がそこで現実に私自身であるのか否か、真実に根源から正しい方向を聴取したか否か、という賭けは、決して終わらない」(Jaspers1948 : 58)と言われている。超越者が実存にとって明確な対象として現象しないという点も『哲学』以来繰り返しヤスパースが主張してきたことであった。

自由を介しての超越者とのつながり、隠れた神、は以前の著作にある主張と同様であるが、「交わり」と超越者の関係については、『哲学』や『真理について』と同様に十分判明ではない。もちろん超越者の探求には理性を働かせることが必要であり、理性は「交わりへの意志」であったからには、交わりの探求が超越者の探求となると類推することはできる。また、「暗号」と「交わり」の関

係についても、理性が交わりを追求するとき、その対象は暗号となる、と類推することはできるが、十分判明とは言えない。『哲学的信仰』においては、哲学的信仰の概念を明確に打ち出すのが主題であり、暗号論については論究が少ない。この点の検討も、暗号論についても詳細な論究がある『啓示に面しての哲学的信仰』なども考慮に入れてさらになされるべきであろう。

5 おわりに

以上の考察で、『哲学』において実存の規定の一つであった「交わり」が、『真理について』や『哲学的信仰』では実存の超越者の探求として考えられるようになったことが確認できたと思われる。さらに「哲学的信仰」の思想においては、「交わり」それ自体が信仰の目標とも考えられることが明らかになった。しかし、「超越者」と「交わり」の関わりについては、十分に解明されたとは言えない。「交わり」のヤスパース思想における展開についてさらに明らかにするためには、この点の考察も必要であろう。

主要文献

(引用文中の下線は原文がイタリックであることを示す。また訳出は基本的に示してある邦訳に従ったが、筆者の考えで訳した箇所もある。)

Jaspers1932 I : Jaspers,K.,*Philosophie bd. I:Philosophische Weltorientierung*,Springer,Berlin-Heidelberg-New York. (武藤光朗訳『哲学』第一巻『哲学的世界定位』、創文社)

Jaspers1932 II : Jaspers,K.,*Philosophie bd. II:Existenzerhellung* ,Springer,Berlin-Heidelberg-New York. (草薙正夫・信太正三訳『哲学』第二巻『実存開明』、創文社)

Jaspers1932 III : Jaspers,K.,*Philosophie bd. III:Metaphysik*,Springer,Berlin-Heidelberg-New York. (鈴木三郎訳『哲学』第三巻『形而上学』、創文社)

Jaspers1935 : Jaspers,K.,*Vernunft und Existenz*, Neuausgabe,Piper,München. (草薙正夫訳『理性と実存』、理想社)

Jaspers1947 : Jaspers,K.,*Von der Wahrheit*,Neuausgabe,Piper, München. (林田新二他訳『真理について』、理想社)

Jaspers1948 : Jaspers,K.,*Der philosophische Glaube*,

Neuausgabe, Piper,München. (林田新二監訳『哲学的信仰』、理想社)

Jaspers1962 : Jaspers,K.,*Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung*, Piper, München. (重田英世訳『啓示に面しての哲学的信仰』、創文社)

註

(1) 哲学的信仰と宗教的信仰の比較については、拙論「哲学的信仰と宗教」(長谷・細谷編『宗教の根源性と現代』2001年、晃洋書房、所収)、「ヤスパースの「哲学的信仰」と宗教的信仰—信仰における自由と絶対性の両極性—」(『米子工業高等専門学校研究報告』第33号、1997)、参照。

(2) 林田新二「ヤスパース哲学における哲学的信仰—包括者思想との関連を中心に—」(ヤスパース『哲学的信仰』林田新二監訳、理想社、1998年、所収)。